

第十一回ワークショップ（合評会）

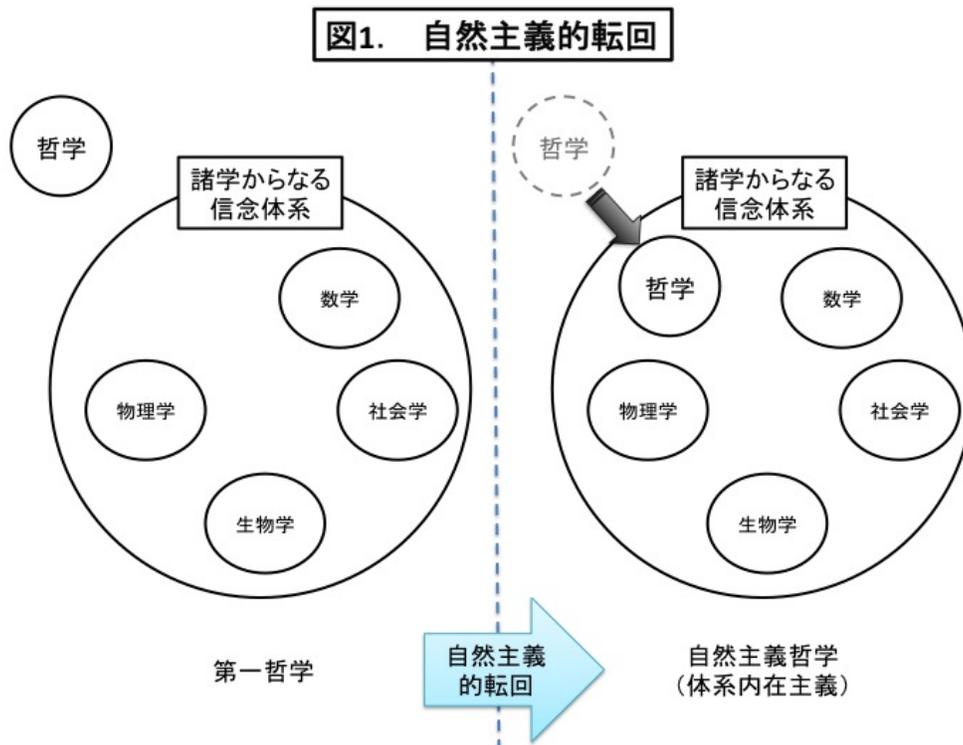
2011年11月30日開催

■合評テキスト

野家 啓一

1992 「「全体主義」の誘惑に抗して」『科学哲学』25: 53-68。

まず井頭氏からテキストについて説明があった。哲学は1950-60年代に、経験諸科学を外側から説明するという第一哲学的な構想を棄却した（自然主義的転回）。当該テキストは、それ以降の哲学の自己理解や仕事のあり方をレビューした論文で、現時点から見ればいくらかの問題はあるが、当時の業績としては第一級のものとして評価でき、特に第一哲学の放棄を改めて体系内在的に理解し直した点（図1）は優れている、と井頭氏は説明した。



こうした井頭氏の説明を踏まえて、以下6点の議論がなされた。

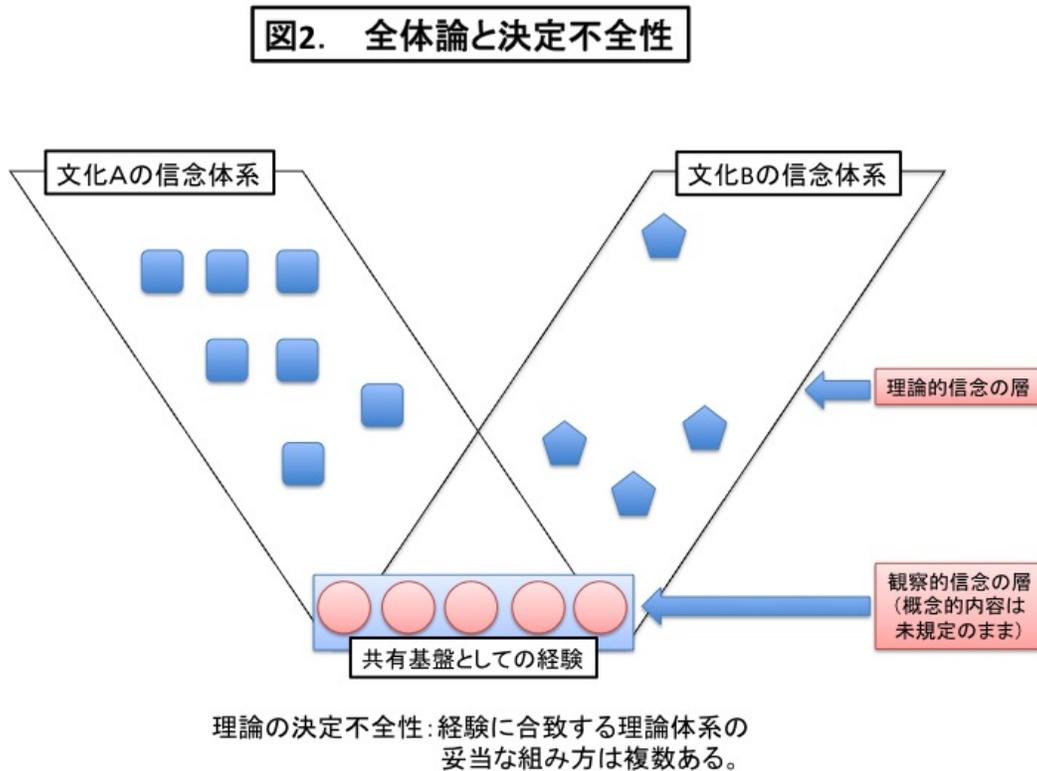
- I 信念体系同士の翻訳に最低限の共有は必要か？
 - II 自然主義において物理主義は前提とされているのか？
 - III 内在主義を実践することの困難さ
 - IV 人類学の翻訳行為
 - V 信念体系の輪郭線、プラグマティックな基準、複数性の取り扱い
 - VI 人類学者のやっている事
-

I 信念体系同士の翻訳に最低限の共有は必要か？

最初に大杉氏から、(1) 人類学の思考習慣からすれば、経験諸科学を超越的な立場から議論できるとの、そもそもの想定が成り立っていたことが、とても不思議に思えること、(2) 以前、井頭氏から、外国語を日本語に翻訳する際に日本語はその作業過程で超越的な位置にたつとの指摘があったが、その指摘と今回の自然主義的展開の議論との関連について、の二点について質疑があった(大杉氏)。井頭氏は、一点目については、デカルトに見るように懐疑論に屈することなく正しい世界像を持てるという我々の自己理解を維持しようとし、一般的知識の妥当性を確保する流れがあったことを踏まえれば、妥当性を再考する動きは不思議ではないと述べた。二点目については、全面的な相対主義は原理的に取れないという意図を持ってそう言ったのであり、日本語の内部において和訳に従事している以上、ある体系内(=日本語)での論評と見なす必要がある、という主旨であるとした(井頭氏)。

これを受けて大杉氏は、二点目について野家氏の見解はどうかと問うた(大杉氏)。井頭氏は、丹治信春の超越論的哲学批判と野家啓一の擁護論とを対比させ、前者は自然科学的知識を前提とした超越論的議論はありえないとするが、後者は体系内部でも超越論的議論に近いことを実行できると考えていると述べた(井頭氏)。これを受けて、大杉氏は図1の外側の丸は世界かと問うた(大杉氏)。井頭氏は、我々の信念体系であり、例えば西欧文化圏だと応じた(井頭氏)。これに対し大杉氏は、丸の外に何かがあるのは自明ではないかと問うた(大杉氏)。この問いに対し井頭氏は、コミュニケーションの範囲を、テキストに即して言えば観察や実験を通して確認される範囲を示したものと応じた(井頭氏)。これに対して大杉氏は、例えば人類学者ヘレン・ベランの著した *Science and African Logic* (2001) にナイジェリアにおけるヨルバ特有の数え方の話がでてくるが、原理的にはナイジェリア特有の考え方の内部からその世界を論評し理解することはできるはずであり、それは超越ということに

なるのかと尋ねた（大杉氏）。井頭氏は、違うと述べた上で、全体論の基本構図としては経験（観察や実験）に基づいて信念体系を組み上げているが、その組み上げ方が異なっていたその結果としてナイジェリアの数の数え方と自然科学のそれとが異なるのだと述べた（図2）（井頭氏）。



大杉氏は、逆に理論や体系が経験や対象を作り上げることはないのかと問うた（大杉氏）。井頭氏は、見えているモノ（例えば石）をどのようなネットワークで理解するかは文化ごとに違うが、異文化に属する人間同士でも観察レベルでは同じモノを認識しており、その点は相互に受け取りあうことができると述べた（井頭氏）。大杉氏は、そこで言う信念体系を支える経験は物理的世界の話かと問うた（大杉氏）。これに対し井頭氏は、物理的世界と言ってしまうと物理学的記述を引き受けることになるのでそれは要請されないが、「これをこれと捉える」レベルの話だと述べた（井頭氏）。大杉氏は、やはり信念体系を支える経験が所与であるという話がわからないと述べた（大杉氏）。これに対して井頭氏はクワインの翻訳の不確定性の議論を挙げて、フィールド言語学者が自分の言語体系において「ウサギが走った」と認識する状況を例に話しを進めた。その状況で現地人が「ギャバガイ」と言った時、「ウサギ」と「ギャバガイ」の対応関係を推測する為の基礎データになりうるものであり、同じ状況

に対して何らかの認識をしたという推測根拠になるだろうと、井頭氏は述べた（井頭氏）。これに対し大杉氏は、ある X という状況に対して精神科医はトラウマを抱えていると言い、別の人は精霊のせいだと言ったとすると、同じ事象に対して異なる解釈が生じたと考えられるのかと問うた（大杉氏）。井頭氏は、彼らはある状況に対して述べているであろうという作業仮説を置き、その発言を理解するしか方法はないだろうと応じた（井頭氏）。これに対して大杉氏は、それは翻訳者にとっての問題であって当事者にとっての問題ではないだろうし、トラウマと精霊の干渉という異なる理解はむしろ理論の方が対象を立ち上げているのであり、ある体系があるからこそ X という事象が想定されるのではないかと述べた（大杉氏）。井頭氏は、作業仮説でうまくコミュニケーションが取れなければ間違っていたということになるのであり、推測根拠がなければどうにもならないし、観察可能などこかまで落とさないと理論的概念の翻訳はできないだろうと応じた（井頭氏）。これに対して深澤氏は、ある反転図式を異なる二人が異なる図式と見ている場合、その二人の認識する図形には還元できない線描があると言うこともできるが、そのように線描と見るとしても恣意的であるという話なのかと問うた（深澤氏）。井頭氏は、基礎的な記述を共有してしまうという点はずせば、先の議論を理解するアナロジーとしては反転図式の認知の話はぴったりだと述べた（井頭氏）。これに対し大杉氏は、基礎的な記述が共有できてしまうのは、反転図式の場合には翻訳の話が大抵は生じないからであり、常に X と言うしかないのではないだろうかとの応じた（大杉氏）。井頭氏は、X と言うしかないものを基盤にコミュニケーションが始まっていると言う他ないと、賛同した（井頭氏）。

それを受けて大杉氏は、認識論の限界を踏まえて存在論へ転換しようとする研究者がそうした立場を取っており、例えば哲学者のアンマリー・モルは診断者や専門家ごとに動脈硬化と名づけられた事象を有する患者の「異なる」身体の在り方と関わっているものであり、患者をめぐる複数の身体が共存すると論じていると指摘した（大杉氏）。井頭氏は、物理的共有項ではないものの共有項を想定するから同様の批判が適用されるだろうという指摘だと思うが、ここではデイヴィッドソンの概念図式批判の話をしたのであり、我々の経験と他の人の経験が接地していないと翻訳不可能であるということ、つまり言語活動だとわかるには図 2 にあるようなブロックが必須になることを言いたいのだと述べた（井頭氏）。大杉氏は、その理解では我々が発話している事は所与になるだろうが、モルの例ではそれが不明なのであり、専門領域ごとに内在的に X という事象に対処できても、全専門領域に共通するよう何かがあるわけではないと指摘した（大杉氏）。これに対して井頭氏は、患者の存在があって、共有されたそれに対して違った形で対処しているからこそ、この図 2 に乗るのではないだろうかとの応じた（井頭氏）。これに対して大杉氏は、自然科学的知見で最終的に固定できるような患者の「一つの」問題に対処しているのではなく、調整者もないのに様々

な実践をしている人達に対応していることの「効果」として一つの事象 X (=動脈硬化) が想像されるに過ぎないということをモルは言いたいのだろうと述べた (大杉氏)。大河内氏はモルの例は死の可能性などの点でかなり限定できるが、ウサギの例ではその状況に含まれる本来特定できない多様な現象 (ex. テントウムシが飛んでいる、風がそよいでいる) の何かに意識を向けているのであって、厳密に言えばウサギがいるという状況さえ共有していると言えないのではないかと疑問を投げかけた (大河内氏)。井頭氏は、一回の出来事ならばその通りだが、類似の状況が反復することで、最終的に特定できなくとも、ある程度は「ウサギ」と「ギャバガイ」が同義語と推測できると思うと応じた (井頭氏)。

II 自然主義において物理主義は前提とされているのか？

ここで大河内氏は、冒頭で井頭氏が行った第一哲学の経緯について言及し、デカルトまで遡る必要はなく、論理実証主義のことを第一哲学と言っているだけではないかと指摘した (大河内氏)。これに対し井頭氏は、本テキストの文脈では第一哲学とは、カントの超越論的哲学にみるように、認識論的考察対象となっている知識実践とは別枠で、経験的知識から独立したものとして哲学を位置づけるもので、必ずしも論理実証主義には限定されないと応じた (井頭氏)。

続いて大河内氏は、第一哲学を放棄しただけで自然主義と言って良い理由が自分には理解できず、超越論的審級がないだけならばヘーゲルで十分ではないかと指摘した (大河内氏)。これに対して井頭氏は、一般に言われている「自然主義」は物理的な対象の集合から落ちるモノを切るという立場だが、自分は、哲学の活動を信念体系内に入れること、つまり第一哲学の放棄であってこれが自然主義の最小限の形であると考えると述べた。その上で、哲学の議論自体も、信念体系の内部に位置づけられている限りで、その探求の対象は自然の中で生じているプロセスであると言える、というように考えていると応じた (井頭氏)。これに対し、大河内氏はそれをなぜ自然と呼べるのかと問い、大杉氏は自然哲学の対象としてきた自然科学の信念体系の中に入るから自然主義と呼んでいるのか、或いは自然哲学に限らずに哲学一般まで含めて自然主義と呼んでいるのかと問うた (大河内氏、大杉氏)。井頭氏は、自分は後者の立場であり、自然主義という語で言う時の自然はほぼ世界とイコールで、世界の外側ではなく内側に哲学を置きなおそうとすることだと自分は考えていると答えた (井頭氏)。

大杉氏は、その発想には世界=信念体系という形で論理的飛躍があると思うと述べた上で、信念体系であれば体系同士の関係だから対象世界は不要ではないかと問うた (大杉氏)。井頭氏は、自分の説明に飛躍があったことを認めた。その上で、信念体

系とは世界を描き出すものであり、例えば科学の信念体系が科学的な仕方世界を描き出すのと同様に、哲学も世界についての何らかの事実を描き出す活動の一つ・世界記述の一種として位置づけ直すべきだと自分は考えており、そのように考えることが自然主義的な哲学の進め方である、と井頭氏は述べた（井頭氏）。これに対して深澤氏は、古い意味で自然主義は超自然主義の「超」部分に対する対抗概念であって、井頭氏の場合は自然主義ではなく内在主義で足るのではないだろうかと言った上で、自然主義者は物理主義を否定しながらもそれを担保しているように見えると応じた（深澤氏）。大杉氏もこれに同調し、「世界についての信念体系」という井頭氏の説明を聞く限り、信念体系なしに世界が存立しているように聞こえると述べた（大杉氏）。これらの批判を受けて、井頭氏は、（1）物理主義ではなく我々が世界を作っているという含意で「世界についての信念体系」と述べたこと、（2）「超」自然主義の何を問題化したかによって思い描く自然が人ごとに異なるので、超自然主義との対比で自然主義を位置づけるとその実質がほぼ消えてしまうこと、（3）自然主義を支持する人達の支持根拠を分析した結果として体系内在主義が提示されていること、の三点を指摘した（井頭氏）。これを受けて大河内氏は、自然主義という人達の間で最大公約数を探したら自然とは関係のないものが取り出されたという印象が井頭氏の議論にはあると述べた（大河内氏）。井頭氏は、自分自身ではその方法を取っておらず、なぜ自然主義を取るべきなのかという根拠を検討していった結果、その中核にあるのが体系内在主義であり、そこから派生しうる自然観は多様であるという分析になったと応じた（井頭氏）。

この話との関連で、深澤氏はクワインの言う理論の決定不全性について言及し、クワイを含めて、物理学的実体を非決定性を確認しながらも再び物理主義に転んでしまう不思議さを指摘した（深澤氏）。井頭氏は、クワインの場合、観察データに基づく点ではどの体系も同等だが、利便性の高さは違うと考えており、利便性（例えば理論的予測や自然の制御）というプラグマティックな価値観を採用することで物理主義的な道具立てになってしまっているという問題があると説明した（井頭氏）。これに対し深澤氏は、野家氏は全体論的なプラグマティズムからむしろズレてってしまったような描き方をしているが、やはり物理主義にコミットしているような様相を呈している気がすると言った（深澤氏）。井頭氏は、その点に関して自分は野家氏を含めた先行研究者とは違う理解の仕方をしており、クワインは物理学的世界観を前提としてそれと合致させるという方法を取っておらず、様々な体系構築の中で認識論的利便性の観点から評価することで物理主義に向かったと理解していると述べた（井頭氏）。

III 内在主義を実践することの困難さ

ここで改めて「超」の問題が取り上げられた。深澤氏は、野家氏がなぜあえて超越論的というか不思議であり、理論的実践の両極性——自然科学と超越論——という意味ではさほど違和感がないが、信念体系と言う時に含意されている日常知や前理論的知まで拡大して両極性を考える場合には「超越論的」という言葉が強すぎると述べた（深澤氏）。井頭氏は、深澤氏の考えに同意しつつも、野家氏は超越論のやろうとしていたこと（＝「超越論的」機能）を体系内在主義的に果たそうとしており、それは科学方法論に関する社会学的研究に近いものだと応じた（井頭氏）。これを受けて大杉氏は、図1においてマルで描かれる個々の内在的宇宙に入りながらも超越的機能を発揮することがどういうことか理解できないのであり、もし内在すれば外側は見えなくなるだろうし、他の宇宙から眺めるということであれば最初に問題化した図式と同様の超越性を帯びるのではないかと疑問を投げかけた（大杉氏）。井頭氏はその危惧は当たらないと述べ、2つの信念体系（例えば生物学と社会学）が互いを分析しあう形でループは成立するが、これはいずれも「外側の観点」のようなものを持ち込んでいないと考えていると述べた（井頭氏）。大杉氏は、生物に対して社会は外側にあるのであれば内在という語は意味を持たないのではないかと問い、西洋形而上学が世界を俯瞰する視点を想定した場合は内在主義だが、井頭氏の言うループは内在主義とは違って、人類学のやろうとしてきたことなのではないかだと述べた（大杉氏）。これに対して井頭氏は、（1）個別の学術的営み一般に対してメタな視点を取りうることを想定した上でその営みの内側でやることは可能であること、（2）営みの外側に出て観察することはできないという意味で（ある種の／戯画化された）超越論的現象学は破綻していると自分は考えていること、の二点を挙げた（井頭氏）。これに関して大河内氏は、超越論的なものをクワインが認めているとパトナムが述べていると野家論文に書かれているが、パトナムの言いたいことは野家氏のように超越論的なものも信念体系の内部にあると言っているのか、それともクワインも結局は外から見ている審級を想定していて、内在しているという言説自体はある信念体系の外側にあるということを行っているのか、どちらなのかと問うた（大河内氏）。これに対し井頭氏は、野家氏の提示している形でパトナムを理解して問題はなく、デューイもパトナムも、そして自分も同じラインにいると述べた（井頭氏）。大河内氏は、パトナムについてはそうだろうと認めつつも、クワインは二値に分けて議論しているわけではないと野家氏が言う時には、井頭氏の方向性で理解していいのかと問うた（大河内氏）。井頭氏はそれでいいと述べ、クワインも自然主義一本でやっているように見えて、認識論的議論をする際には内部で超越論的機能を果たすような言説を構成してしまっているということを野家氏は言っていると考えられると述べた。その上で井頭氏は、信

念体系の境界を作る輪郭線を描くことは問題があるのではないかと述べてきた大杉氏の発言に同意し、全体を語ることは不可能だという自分の立場からすれば全体を描くような外側の線は描けないと思うと述べた（井頭氏）。大杉氏は、境界線を引いて全体を想定するから初めて内在主義と言えるのではないかと問うた（大杉氏）。井頭氏は、外側に立つことが可能な選択肢である限りにおいてはその通りだが、その立ち位置を取ることは不可能だと自分は考えていると応じた（井頭氏）。大杉氏は、それは人類学者にとって当然すぎることであり、そういう議論をする欲望がわからないと述べた（大杉氏）。井頭氏は、方法論や研究対象によって内在主義に辿りつくアドバンテージを人類学が持っていたのだらうと述べた上で、信念体系の外側の境界線を背理法のように、「円の外側に立つことができないと言うことによって境界線を捨て去る」のがいいのではないかと述べた（井頭氏）。これを受けて大杉氏は、人類学者は単に政治的問題、つまり表象の問題があったから、そのことにいちはやく気づけたのだらうと述べた（大杉氏）。

IV 人類学の翻訳行為

これを受けて深澤氏は、宗教学はある社会や宗教を完結した一存在として全体を描くということを一方向でずっとやってきており、超越的視点は最初から相対化されていたわけではないと指摘した。その上で、そもそも対象を描くこと自体が超越的な構えを必要とする以上、人類学を含めてその意味での超越的構えを完全に克服しているとは言えないのではないかと深澤氏は問うた（深澤氏）。大杉氏は、伝統的な民族誌を書く人は今でもいることを認めた上で、根源的には不可能なのに実践上の目的から二言語間で翻訳しようとする場合、翻訳される言語に対して自分達の翻訳する言語が超越的な立場にあるわけではなく、単に自言語や人類学というローカルな世界に彼らのそれを移し変えているだけだという意識の方が個人的には強いと述べた（大杉氏）。これに対し深澤氏は、現在は確かにそうだろうが、歴史的に人類学は抽象度の高い知に置き換えるという真理請求を特に強く持っていたわけで、ある種の「超」があったのではないかと述べた（深澤氏）。大杉氏は、ある種の「超」への希求があったことを認めたくえで、そのような「超」による多様性の包摂や、逆に「完全な翻訳」を想定するような内在主義は、「他者の他者性」に依拠する人類学の存立根拠を失わせてしまうことを指摘し、対象の「外」に立ちつつも、同時に超越的にはならないような位置取りを模索しているのが、人類学に対する現状理解であると述べた（大杉氏）。この点に関して井頭氏は、異文化理解に際して、それを自分達の世界理解に完全に収まるものとして想定するのはあきらかにダメで、違う形の方向に伸びている部分があ

ると想定するべきではあるが、最低限の事象 X に対する認識を共有していないとコミュニケーションが成立しないというデイヴィドソンの議論は個人的には引き受けたいと述べた。その上で、人類学における他者の他者性という理念は、信念体系の完全な共有という発想を捨て去るだけのものなのか、それとも最低限の事象 X に対する認識の共有という部分までも捨て去るものなのか、と井頭氏は問うた（井頭氏）。大杉氏は、人類学の伝統的なエスノグラフィは様々な分節化を並置し、別の体系のあるモノがこの体系のこれと相当する「かもしれない」という形で提示することで、少しでもわかった気になれる部分を提示してきたのであり、共有を予め想定するのではなく、結果として完全な翻訳はないものの粗末ながらも辞書（対応表）ができるという価値の作り方をしてきたのだと応じた。その上で大杉氏は、どこのフィールドに出掛けても別の場所であったものの違うバージョンを集める作業になってしまう恐れがあるからこそ、人類学にとって内在性は危険なものだと述べた（大杉氏）。

これに対し井頭氏は、内在性について言えば、「これが共有されている具体的なものだ」といった想定をしない所から出発すべきだ方法論的な話としてなら同意できると述べた（井頭氏）。深澤氏は、人類学者にとって実践的な目的から「それなりに使える辞書」ができてしまうということと、体系同士の比較を通じて翻訳が達成されるという形である社会の記述ができるということとはニュアンスの異なるものであり、その辺をどういう風に克服しているのかが哲学から見ると不思議に見えるのではないかと述べた。大杉氏は、そうだとすれば文学者の実践は神がかり的な行為だろうと応じた（大杉氏）。これに対し深澤氏は、文学についていえば異言語もまた我々と似た分節化した言語であり、ジャンル性に対する了解もあるので根源的翻訳の問題ではないだろうと述べた上で、神学体系を持っていて通訳しやすい部分がある近代宗教を扱う宗教学と、そうではなくて我々とは翻訳しにくいような事柄を対象とする人類学では、対象の真理請求の仕方がかなり異なるものを対象としており、困難度がかなり違うだろうと述べた（深澤氏）。

V 信念体系の輪郭線、プラグマティックな基準、複数性の取り扱い

ここで再び図 2 に話を戻した。大杉氏は図 2 の下にあるブロックが、伝統的な意味での「下部構造」に見えてしまうこと、その意味で深沢氏の指摘するような物理主義を抜け出していないような気がする、と問うた（大杉氏）。これを受けて大河内氏は、井頭氏がプラグマティックに自然を支配すると言う時の自然とは何かということと、それが何らかの物質的世界を想定し、例えば全く異なる信念体系においても「食べられる／食べられない」植物があるという意味で図の下にある個々のブロック

があるのではないかと述べた（大河内氏）。井頭氏は、もっとプリミティブなもので、分節化できないようなものだと言った（井頭氏）。大河内氏は、そうしたな形での外部性はあるのかどうか、その場において何がプラグマティックとして役立つかということはある種の自然として言うことはできるのかもしれないと述べた（大河内氏）。井頭氏は、プラグマティックな有効性の話をする時に「自然」という全体を指すかのような語を用いる必要はなく、うまく個別のタスク（ex. うまくボートを漕ぐ）を処理するという意味で十分だと述べた。ここで大河内氏は、「物理学的」と「物理的」を区別して考えた方がいいのではないかと、物理学的説明がなくとも効用としてうまくやれるということがあるだろうと述べた（井頭氏）。大杉氏は、「物理的」の方は進化論でいいのではないかと述べた（大杉氏）。大河内氏は、もしそこから出発して説明し始めて、それを自然主義と言うのであれば個人的には理解できるが、井頭氏はそれと違うことを意図しているのではないかと問うた（大河内氏）。井頭氏は個別タスクを処理することと、それをどのような理論で理解するかは別の話であり、後者を想起させるので「物理的」という語は使わない方がよいだろうと述べた（井頭氏）。

ここで大杉氏は、人類学の儀礼論では意味論に囚われているという議論が繰り返されてきたが、実際の儀礼は生の切迫に対処する（ex. 病気に対処する）というテクノロジーであると述べた上で、そうした儀礼についてクワイン的立場や進化論からすればプラグマティックな意味で利便性が低いから淘汰されていくことが含意されているかと問うた（大杉氏）。これに対し井頭氏は、クワインは、進化論的観点でそうしたものが淘汰されるという風に考えていたというよりは、「我々の言語や認識の目的は予測と制御なのだから」と考えていたと述べた（井頭氏）。大杉氏は、それは進化論ではないのかと問うた（大杉氏）。井頭氏は、予測と制御できるものが必ずしも存続するとは限らないという意味で進化論ではないと述べた（井頭氏）。ここで大杉氏は、何が有効なものかということの計量する基準をクワインは持っているのかと更に問うた（大杉氏）。井頭氏は、恐らくそうで、そこは彼が無反省だと述べた（井頭氏）。その上で井頭氏は、自分と異なる信念体系に生きる人にとっての目的が自分の価値体系のそれと同等だと考えており、プラグマティックな目的は自分が納得できる範囲を超えてありうるのであり（＝目的の多元性）、その意味で人類学に敬意を表すると述べた（井頭氏）。ここで深田氏は、世界が多元的に見える人と、多角的に見えない人がいるのだろうと述べた（深田氏）。井頭氏は、クワインは後者の人間だったのかもしれない、別に悪くないという話になりうると述べた（井頭氏）。大河内氏は寛容にならなければと述べたのを受けて、井頭氏は寛容の押し付けになりかねないということですよと述べ、深田氏は寛容になるということが超越的視線になってしまうのではないかと危惧を表明した（大河内氏、井頭氏、深田氏）。その上で深田氏は、外側はなくて内在的に書くということには同意するが、しかし図1の小宇宙から別の小宇宙

を実際に描こうとする時に階層性が出てきてしまうからこそ、外から対象を切り離れた上で異質な人達がいるという風に描きだしてしまっているのではないかと人類学者は常に恐れているのだと述べた（深田氏）。井頭氏は、階層性に関しては、「向こうからこちら側を描く」という部分が担保されていれば問題はないのではないかと述べた（井頭氏）。これに対して深田氏は、実際観察するつもりが観察されている事はよくあって、相互に描いていると言えるけれども、それを多元として同じようなものとして言えるのか、論理的に同じであるにしてもやり方が違うにも関わらず同じだと言えるのかと悩むと話した（深田氏）。これに対して井頭氏は、自分は生物学と社会学の相互対象化の話をしたが、そのケースで相互記述を理解できるのはどちらも自分自身の理解の範疇にあるからなわけで、たしかにそれが「異文化的他者」になった場合にはわからないのかもしれない、そこはたしかに引っ掛かる点だと述べた（井頭氏）。これを受けて大杉氏は、複数性の取り扱い方が全く違う可能性があるのにも関わらず、哲学者が書く一つの世界で整形できてしまうという意味では第一哲学になっていないかと井頭氏に問うた（大杉氏）。井頭氏は、（1）ここで多元論の話をしているのはあくまで自文化圏内における物理主義的な統一に対する抵抗する為のものであること、（2）自文化から出て別の世界像も含めて多元論を論じるにはまだ自分の考察が不十分であること、の二点を挙げた上で、それでも自文化圏内のできるのであれば外挿すれば異文化との関係でもできるであろうという見通しは持っているとして述べた（井頭氏）。大杉氏は、その捉え方でもよいと思うが、「こうに対してこれであると捉える」ということ自体が一元的かつ俯瞰的であり、様々な宇宙の処理の仕方が違う可能性があるのに、同一性を想定しているように聞こえると述べた（大杉氏）。これに対し井頭氏は、あくまで図2は異文化に対する仮説であり、だから問題はないと考えていると述べた（井頭氏）。

VI 人類学者のやっている事

ここで大河内氏は、日本語で翻訳する際に超越的になるという話に戻し、自分としては記述する言語／記述される言語の違いを前提としているそちらの議論の方が理解できるのであり、ここまでの議論を聞いていて人類学者が何をしたいのかがわからなくなってきたと述べた。その上で、対象記述の際に自分の言語で記述するしかない以上、こちら側からも向こうからも記述できるという時にはある意味で俯瞰しており、そういうことをする必要があるのでと大河内氏は問うた（大河内氏）。大杉氏は、特に必要はないと述べた上で、自分としては翻訳を通じて見方をズラすことしか考えておらず、研究していれば必ずと一段上の審級に位置どっていると勘違いしてしまいが

ちなので、それを避ける為にブレーキを踏みっぱなしであると述べた（大杉氏）。深澤氏は、ではどのような形の記述になるのかと問うた（深澤氏）。大杉氏は、人類学一般には敷衍できないが、自分としては橋が渡せるところまで抽象度を上げておいて、最後に、その抽象作業そのものを疑い、抽象化それ自体を自らの認識枠組みに埋め込みなおして、議論をひっくり返すようなことを繰り返していると感じると述べた（大杉氏）。深澤氏は、では何が残るのかと問うた（深澤氏）。大杉氏は、それによって対象文化を以前と違った相貌で見ることができると述べた。その上で大杉氏は、（１）多文化主義や同化主義など多様性の取り扱いは様々にあるが、図 2 のように描いて方向性の違いと捉えてしまうとやはり間違っているように思えること、（２）差異はあっても言語に縮減していったって何か会話が成立するところまで刷り合わせをしていっていることを考えれば、図 2 のブロックは束の間に立ち上がるとしても事前にあるものではなく、上にある複数の円同士の関係は異なる規範的態度があると思うこと、の二点を述べた（大杉氏）。大河内氏は、大杉氏と井頭氏の間には大きな違いを感じず、なぜそうした作業が可能かを照合していくと図 2 になる気がする」と述べた（大河内氏）。これを受けて大杉氏は、とはいえ美的にはかなり異なるだろうと述べ、人類学者からみると隣接科学、たとえば社会学などは、日常性を疑うといいながらも、分析で使用されるフレーズ（ex.階級、戦略）が限定されていて、そのことに違和感を抱くこと、そしてそれと同種の違和を、図 2 下部のブロックのアプリオリな想定に感じると述べた（大杉氏）。

大河内氏は、それは方法論的反省をしないこと、つまり自分が実践的にやっていることを方法論のレベルで説明することはできるはずなのにしないことなのかと問うた（大河内氏）。これに対し深田氏は、人類学の概説書に比べて社会学のそれは格段に多いと述べた上で、人類学者フィールドワークについて語らない人が多く、自らのやってきたことに自信がなく、偶然できてしまっていると思っている人が多いのではないかと述べた（深田氏）。大河内氏はできてしまったことをどうやって確認するのかと問い、大杉氏は解釈共同体の決めることだと応じた（大河内氏、大杉氏）。大河内氏は、そこを取り出して井頭氏は分析しているのではないかと述べた（大河内氏）。井頭氏はそれに同意した上で、人類学者のやっている具体的な研究プロセスを見れば、自分のモデルの是非が言えるのではないかと述べた（井頭氏）。これに対し大杉氏は、そうした試みは人類学で 80 年代にやられたが自叙伝にしかならなかったこと、結果的に内部に閉じこもって内部解体するという様相を呈してきて、外側から内側を壊すという人類学の楽しみを殺ぐ結果になったと述べた（大杉氏）。井頭氏は、他なるものを見ることを通じた比較を大事にするという観点からすれば、図 2 に見るブロックから出発するのは受け入れがたいというのはわかるが、抽象的に現地の用語を理解する為の作業を探っていくとこうい

図式を使っているのではないかという気がする」と述べた（井頭氏）。これに対して大杉氏は、様々に分節化された自分のローカルな認識枠組みを使うのは当然だが、先の図式だと「これが私達でこれが彼ら」とあらかじめ述べてしまえるのだとすると、分節化を共有しているように見えると述べた（大杉氏）。井頭氏は、分節化はギリギリ共有していないとは思ひ、状況に関しては共通していても理解の形式という道具立てまでは共有しているつもりはないと述べた（井頭氏）。

ここで話は再び、人類学の自戒のベクトルと、対象社会を記述するベクトルのギャップに戻った。深澤氏は、一方では根源的翻訳不可能性がありながらも、他方ではある仕方でコミュニケーションを取って部分的に共同的な生があるという実感を、どのように折り合いをつけているのかと問うた。続けて、前者を隠蔽するわけにもいかない一方で、確かにそれをひたすら描くことも不毛だと思うが、フィールドワークのプロセスが隠されて対象社会の記述が提示されると、やはり当該社会を了解していおり真理なんだという主張を持っているように見えるとも、深澤氏は述べた（深澤氏）。これに対して大杉氏は、マリノフスキー時代と違って既に世界中に表現能力を持つ人達があふれており、それとは違ったオルタナティブを書く作業が実際なので、大きな物語と同等の地位でこれが言えるに過ぎないと言う程度のことであり、さすがにマリノフスキーの『西太平洋の遠洋航海者』の序文のような真理主張をする人はもうないと述べた（大杉氏）。これを受けて深田氏は、自分の書いた事が本当かどうかはわからないが、私が理解可能な基盤（例えば図2のブロックのようなもの）を見つけたと思ったから書けるわけで、本当かどうかは別にして書く意味があるとすれば、少なくとも同じブロックの上で成立している私の世界と他の世界の違いがわからないと意味がないと思うと述べた（深田氏）。これに対し井頭氏は、ブロック部分というより、むしろ円の部分を正しく理解している方がより深刻な問題としてありそうだと述べた。その上で、例えば古代ギリシャにおけるアトム論を現代における素粒子と原子のどちらに近いかどちらでも解釈できるといったように、下の部分を共有していても出てくる問題があり、人類学者は状況を直接指示する時に登場するような観察的な概念ではないような理論的概念も含めて異文化理解をしようと思われるが、別様の解釈可能性のあることを対象の人達が理解しているのと同じ仕方で理解できているというよりは、全く異なるネットワークの中で理解してしまっているという可能性の方が大いにありそう気がする」と井頭氏は述べた（井頭氏）。これを受けて深田氏は、「私達の世界はこうで向こうの世界はこうだ」と接点を探して比較して描き出すと、それはパラレルな二つの世界ではなくなっていくので、どういうモデルで対象社会を描くのが何となくわからなくなってきたと応じた。その上で深田氏は、昔の人類学のように多元性を前提として彼らの世界を描き出すというやり方が通用しなくなっていて、現在ではある種の状況を前提とした二つの違うモデルとして描けないのは明白であると述

べ、違う場所にあるわけではなくもはや繋がりあっており、多元的世界を前提としてあの人達の世界を描き出すっていうモデルが成立しないような気がするし、違うものとして並べられて色々あるよって言って何か言ったことになるのかと思うと述べた（深田氏）。

ここで武村氏は、今の話は学術同士の相互照射の話ではなくある対象を記述する時の話だろうし、だとすれば図のブロックは色眼鏡、つまりある観察を行う為のツールなのかと問うた（武村氏）。井頭氏は、色眼鏡ではなく出発点となる状況で、それを一定程度共有していないと言語活動として理解できない最低限のものであって、こちらから他方に対する理解の前提となる要請であり、恐らく向こうからこちらを理解する際にも同じ要請が入ってくるだろうことであると述べた（井頭氏）。武村氏は、それは主体が何かを観察し記述する為の前提ではなくて、相互理解の為の前提という話かと問うた（武村氏）。井頭氏は一方から他方を理解するという解釈の文脈であると述べた（井頭氏）。更に武村氏は、この図はデータをどう揃えるかということを図示したのか、それともデータの集積を図示したものかと問うた（武村氏）。井頭氏は後者に近いと述べた（井頭氏）。武村氏は、そもそもデータを集積する時にはある観点から行う以上、その時点で既に私が生きている世界に対する私の世界理解がそこに入っているのではないかと述べた（武村氏）。井頭氏は、確かにそうだが、一定の事象レベルでの連関を土台としないと私達の世界／彼らの世界のコミュニケーションは成立しないだろうと述べた（井頭氏）。武村氏は、かなり限定的な話、つまり言語を持った人類という集合体を理解しようとする時に限った話であって、芸術作品の理解などを想定した話ではないと思われると述べた。その上で、やはりその図2ではない気がするし、それ自体が観察者の世界だという気がするし、こちらが観察者という前提で話すとすれば二つの小円は対等ではないだろうと武村氏は述べた（武村氏）。井頭氏は、中央にあればいいのかなと思うが、議論的にはブロックは下であると述べた（井頭氏）。

ここで大杉氏は、中の小円でも同じことが言えるのか、例えば一つの円が宗教でもう一方が物理学でもよいのかと問うた（大杉氏）。井頭氏はそれに同意した上で、我々の概念図式というのも分野ごとに異なり、例えば「自由」をめぐる分野ごとの規定の違えが例となるだろうと述べた（井頭氏）。これに対し大杉氏は、「自由」まで基盤部分まで含めると、これまでの話とは逆に、何かを共有していることがかえってディスコミュニケーションを永続化させることもあり得え（例として、米国とキューバ間の民主主義や自由の概念）、その場合にはむしろ、共通の基盤となるブロックと考えないほうが良いのではないかと、との疑問が提出された（大杉氏）。これを受けて井頭氏は、ここでは「りんごを投げたら落ちた」というような話をしていて述べた（井頭氏）。大杉氏は、井頭氏の挙げる例が最終的に物理になっていると指摘し、多元主義になってないのではないかと述べた（大杉氏）。井頭氏は、自分は

物理とは言っておらず、りんごが神からの授かりモノだという宗教的な発想があってもよいと述べた（井頭氏）。深澤氏は、大杉氏の問いは物理学的ではないけれども物理的であるという話ではないのか、つまり観察データではないが基本行為とか基本運動に還元しているのではないかと問うているのだらうと述べた（深澤氏）。大杉氏はそこから物理学が発生するのではないかと続けた（大杉氏）。これらを受けて井頭氏は、異なった見解を持つ者同士の間でのコミュニケーションをする際には共有可能な事象は物質的なものであろうから、その意味で物質的なものを基盤にするしかないのではないかと述べ、これが物理主義へと至る道か否かについては再考の余地があると述べた（井頭氏）。ここで大杉氏は、文化人類学者デ・カストロが多文化主義を批判して多自然主義を打ち出し、我々の言うところの認知や文化はどこでも共有されているが自然が違うのだという形の発想を打ち出しており、先にあげたモルの動脈硬化の多元性とあわせて、「基盤」そのものの複数性への配慮の必要性を述べた（大杉氏）。深澤氏は、モルの話は相貌論、別の仕方での現実の立ち現れるという話とどう違うのか疑問に思うし、それを存在論とまで言う必要があるのかと述べた（深澤氏）。これを受けて大杉氏は、自分もそこに興味を持っていて、多くの場合認識論で十分だとも思うことが多いが、ここでのポイントは、相貌論がいまの議論でいう「基盤」の単一性を安易に想定してしまう問題性だらうと、述べた（大杉氏）。深澤氏は、どちらも哲学の言葉であって、人類学者と哲学者の理解のズレがおもしろいと思うが、哲学者からすればなぜ存在論という言い方に戻ってしまうのかという思いが強いのではないかと述べた（深澤氏）。井頭氏は、多自然主義という言う時には、異なる自然同士の間でもある自然の中で起きた動きが別の自然の中に影響を及ぼすことがありうるわけで、そうした連動をどう説明するかが違う存在論を保持する為には一つの課題となるのではないかと述べた（井頭氏）。大杉氏は、複数性に対する独特の扱い方をしているという意味ではアマゾンの人々も井頭氏のそれも「論理的には」同値であり、こちら側の複数性の取り扱い方を保持したまま、彼らの複数性の取り扱い方を「独特な認識」として自らに包摂することで、差異は解消されるわけではないと述べた。その上で大杉氏は、様々な複数性の取り扱い方を井頭氏の図式とは違う形で構想する人達もいるだらうから、ローティ的な意味でのプラグマティズム、つまり差異は解消されないだらうけれど何とか「うまくやっぺいこう」という形に限定すれば賛同できるが、利便性といったプラグマティックな基準設定は厄介だと述べた（大杉氏）。井頭氏は、役に立つという時に指定している目的というものが狭すぎるというのが物理主義の問題点ではあったが、「役に立つ」という装置自体が問題だったわけではないと自分は考えていると述べた（井頭氏）。